

目 次

『卒業』そして今	—〈実社会へ出た先輩達は何を考えているか〉—	
職場の現実	.....	古市 雅之 ..... 1
「学生から銀行員へ」	.....小さな足跡を残して	土岸 史典 ..... 1
教室から聞こえてくる	.....	大西 五己 ..... 2
「社会人になって知る」	.....社会における女性	原田智恵子 ..... 3
仕事は仕事メシのたね	.....	横山 朗 ..... 3
後輩諸君への手紙	.....社会人2年目の雑感	広瀬 浩一 ..... 4
『教育実習感想文』	—〈未来の教育実習生のために〉—	
教育実習について	.....	深萱 和男 ..... 5
教育実習を参観して	.....	小林 文男 ..... 6
○4年生の方、実習どうでしたか？		
教育実習を終えて(英語)	.....	村松 誠 ..... 7
教育実習を終えて(理科)	.....	品川 博美 ..... 7
我つかの間のエンターティナーとなりて?!(社会)	.....	原田 邦彦 ..... 8
Tschüß 教育実習ノ(数学)	.....	原頭 基司 ..... 9
教育実習を終えて(国語)	.....	中井 良幸 ..... 10
○生徒の反響は.....		
きんちょうとあこがれ	.....	梶山 直美 ..... 11
「人間を教育する人々」	.....教生の方々に望む事	横溝 珠美 ..... 11
総合科学部教育実習について	.....	竹之内一子 ..... 12
終了の辞に代えて	.....教えることの喜び	平岡 耕一 ..... 13
◆もう1つの総科◆		
大阪府大総合科学部を訪ねて	.....	安永省二郎 ..... 14
だいがくさい♡大学祭	~あの日々よもう一度~	
「大学祭の音が聞える」	.....	成田 実香 ..... 16
僕の私の大学祭体験談 PART I	.....大学祭雑感	雲井 司 ..... 17
” PART II	.....やったぞ!大学祭、手づくり喫茶	中田 和江 ..... 17
” PART III	.....嬉し悲し女装の体験	ヒロ・ウォーター ..... 18
自分自身が大学祭	.....	松浦 豊 ..... 18
「大学祭……極致!!」	.....うらかたさんごくろうさん(自画自賛)……マルガメ・セカンド	..... 19
『環境科学野外調査A』を終えて	.....自然の総合的考察への入口……大内章義・神坂伸一	..... 19
3人寄れば同好会	—〈紹介しよう私のサークル〉—	
環境不安研究会	.....	..... 21
カスバズ	.....	..... 21
法社会学研究会	.....	..... 21
婦人論研究会	.....	..... 22
資本論研究会	.....	..... 22
科学論研究会	.....	..... 22
国際情勢を考える会	.....	..... 22
S F研に花束を	.....	..... 22
統計学ゼミナール I・II	.....	..... 22
Sokka Tennis Dohkohkai	.....	..... 24
広島大学比較文化研究会	.....	..... 24
総科サッカー同好会	.....	..... 25
ⓧソフトボール大会始末記ⓧ	.....=頭脳とプレイに相関性をみた!?=.....	岡田 大介 ..... 26
〈シリーズ・その12〉		
学問のすすめ	.....	仁蓮 孝昭 ..... 27
〈シリーズ・その5〉		
大学研究所めぐり	.....	塚田 守 ..... 29
学部の記録	.....	..... 30

卒業生にきく

# 『卒業』そして今……………

## 〈実社会へ出た先輩達は何を考えているか〉

### ドキュメント

#### 卒業生は今 (I) ……職場の現実

そうです、学生の頃、遊び回っていた人も今ではびかびかの社会人。

成績不良、卒論見直しゼロ、才能なしの三重苦の私も、「奇蹟の人」として、会社に入ったのです。

しかし、タレント不足は、いかんともしがたく、苦悩の毎日を送っています。私のように、一応、マスコミと名のつく(?)会社に入ったら、雑学が、必要とされ、「そういえば、確か、あの時の講義で聴いたような」「あの本に書かれていたような」と、度々思うのだけれど、中々はっきりと思い出せないのです。「あー、真面目にノートとってれば良かったなあ」「真剣に聴いておればなあ」と、悔やむ今日、この頃。

会社というところは、意外に、シビアで、仕事でも、手とり足とり、教えてくれると思ったら、大間違いなのです。「あの一、ここはどうなってるんでしょうか」「自分で調べれば、わかるやろ」「はい。すみません」てな具合です。

私の具体的な仕事を申せば、最近、なんと製菓の眼ぐすりの宣伝で有名になった、校エツと言う仕事です。あまり、面白いと言えるものではありませんが、会社が、組織として活動している以上、どんな小さな事も仕事として組み込まれています。だからどんな仕事に就くかは、会社次第とも言えます。そこで、我々、新入社員一同は、「どんな職場に、いったとしても、いつもニコニコ明るい笑顔」のスローガンの下に頑張っているのです。

あまり立派な先輩ではないので、大した事は、言えませんが、後輩諸君の健闘を祈ります。

54年度 情報行動科学卒業 古市雅之

「学生から銀行員へ」

— 小さな足跡を残して —

落葉をもて遊んで、秋から初冬への季節の移り変わりを告げる冷たい風が吹いてくる、今日この頃、私は学生時代の自由な空気をたいへんつかしく思

い出しています。広大キャンパスの森戸道路を歩く毎日から遠ざかって、早くも2年が過ぎようとしています。就職してからも、たまに広大を訪れますが、春の新入生歓迎風景、夏の長期休暇、試験シーズン等、4年間というものが短いドラマのように脳裏をよぎるのです。

大学時代に、自由な空気を十分味わった私が、社会でも最も制約の多い、ある意味でかたい職場である銀行に勤めていることが、今だに信じられないようです。そして大学の専攻とはまったく畑違いの道を歩いているわけで、入行当時はとても不安にかられたものでした。銀行という職場は、一般的に華やかな職場に見られがちですが、実は大変じみで、どの分掌をとってみても、一步一步階段を登るように手間のかかるものです。細部にまで神経を配らなければならず、ゆとりをもつ余裕など考えられません。「学生時代は90点をとれば良しとされるが、社会は満点か零点しかない。」ということを入行した当時よく聞かされました。特に銀行員にはそれが要求されるのです。金銭によるトラブルほど、大きな問題を生むものはないと言うことはご承知のことと思います。

毎日の張りつめた気持ちを解放しほぐす意味で、私は休日になれば、もっぱら趣味を楽しむようになっています。初雪の便りを聞けば、朝早くから車を走らせ、広大な山々を眼下にスキーで我を忘れ、1週間の連続休暇には、スケジュールのない「何でも見てやろう」精神で旅行に出かけるといった具合です。学生時代には、何をしても自分の時間を作り出せるものでしたから、なしくずし的に時間を浪費することも、度々ありました。

しかし銀行員として、管理社会の大きな社会ではその歯車の1つとなって動く現在の私にとって、時間ほど貴重なものはないと思っています。自分の楽しみをより大きくするため、計画的に有意義に過すことが大事です。

社会に出て常々思うことは、「良い上司と良い同



す。毎日こういうシーンがくりかえされる。とくに班などでの話し合いのときは、とくにうるさい。もしあなたが神経質な性格の持ち主なら、きっと登校拒否をおこすだろう。中学生、とくに一年生はそんなのだ。でもここがまんこのしどころである。さわぐのは、彼らのせいじゃない。教師のまずさにある。全てが教師の責任である。授業が楽しくないから、面白くないからそういう行動に出るのだろう。さらに最近では、そうか、彼らはさわぐ場もないのだ。せめてこの時間にさわがせてやろう。子どもとはさわぐものだ。さわがなくなったらおしまいだ。などと自分にいいかきながら、彼らの会話に耳をかたむける。おっ、きこえる、きこえる、いろいろな子どもたちの世界のつぶやきが。

54年度 社会文化卒業 大西五己

社会人になって知る

— 社会における女性 —

卒業して1年半。まだ、たった1年と少ししか過ぎていないのに、既に3年・5年と過ぎたような気がする。今は、学生時代があった事すら、遠い昔のことのよう。それでも、就職して1年目は、夏になれば、夏休みを、お正月が近づけば、冬休みを思い、社会人になると長期休暇がなくなるんだという実感があつた。だが、2年目になると、「今、夏休みなのか。」ぐらいの感じしかなくなった。休みはないものという自覚ができたと言えば、聞こえはよいが、毎日毎日をただなんとなく過し、生活の節目がなくなったと言える。

社会人になってと、改めて考え直してみても、特記することは何もない。このまま1日1日を過ぎて、気がつくと10年勤めていたことになる危惧があるくらい。最近では、急ぎでない仕事が多くなってくると、やらなければやらずに済ませてしまうようになってきた。要領がよくなったわけだ。学校にいれば、提出期限やテスト等があり、当人はやる気がなくても、周りからやる気にさせられた。しかし、仕事をいろいろかかえ込んで、できないものがたまってくると、一時はできないためにいらいらするが、それを過ぎると何のうしろめたさも覚えなくなる。その場しのぎのみをやって毎日を過すだけだ。だが、ふっとそんな事ばかりしていいのだろうかという不安が頭をもたげてくるが、それも一瞬、忙しくなれば、また毎日を過すのみ。よく仕事というものは、自分で見つけるものと言われるが、入社1年半では与えられる仕事ばかり、こんな事がしたいと思っても、

関連部署にいる人は良い方で、本当に思った事をさせてもらえるようになるまで、何年かかるかわからない。おそらく、そこに至るまでに坐折してしまうだろう。

私の勤めている会社では、これからは、女性の働きを重視するという事で、月1回勉強会が実施される等いろいろ優遇されている。しかし、これまで男性主体であったものが急に変わるはずがない。思いはあれど、実行が伴わず、中途半端な状態である。入社時には、「これからは女性に仕事をしてもらわなくては。」と言っている会社ですら、この程度である。大学を卒業するまでは、成績偏重ではあったが、男女の別なく、実力で勝負できた、入学試験で女性だから不合格になることもなかった。しかし、一般社会では違っている。単に女性というだけで評価が変わってくる。今、与えられている仕事に満足すれば、10年続くかもしれない。が、もう一段階上の仕事をしたいと考え始めた時、「女性である」ことが、大きな障害となる事を、今、痛切に感じている。

54年度 地域文化卒業 原田智穂子

ドキュメント

卒業生は今(Ⅱ) — 仕事は仕事 メシのたね —

とうとう、「スネカジリ」の生活とも、オサラバして、今は社会人として毎日元気に働いています。といっても、今は研習期間なので、やっていることは学生の頃のバイトといっしょで、遊びながら給料をもらっているような感じです。

会社というものは組織として活動している以上、かならず、末端で働く人達はいるものです。新入社員はそこからスタートすることになるのですが、「仕事は仕事、メシのたね」とわりきって、精神的な余裕は常に持っておくと良いと思います。

今は寮に入っているので休日などは、同期の連中とあちらこちらへと行っています。夜になると一室に集まって、酒を飲みながら、会社の悪口を言いあう毎日です。こんなことはどこの会社に入っても同じだろうと思いますが、学生時代よりも人間関係が重要となってきますので、これから就職される方々も頭のかたすみに入れておいて下さい。

54年度 情報行動科学卒業 横山 朗

後輩諸君への手紙

— 社会人2年目の雑感 —

〈はじめに〉

'79年3月に環境科学コースを卒業し、地元、神戸へ就職致しました。あれから一年半が経過し、ようやく会社にも慣れて、言いたいことが言えるようになってきたこの頃です。

先日、大学から、“社会人になった感想”を書くようにとのお話をいただき、ハイハイと承知しました。

〈会社の生活〉

大学4年生も終わりに近づいてくると、卒論はもちろんのこと、あれもやっておかなければ、これもやっておかなければ……と、あせりまくってきます。それは、逆に言えば、社会に出たら、やろうと思ってもできなくなるということがあまりにも多く予想されるということです。

私が当初予想していた会社生活は、夕方、5時になったらまっすぐに家へ帰って、テレビでも見て一日が終わるような消極的な生活でした。充実した大学生生活に比べて、これから先に予想されるそんな退屈な生活に恐れをいだいておりました。

ところが、4月中は同期入社の中（会社の人減らしの最中に採用されただけあって、男ばかりの少数殺伐集団）と、一カ月の実習があり、学生以上に学生らしい生活を送る破目になり、まったくの予想はずれです。

さて、本格的に職場に配属されると、今度は毎日のように、部長、課長、先輩等と、飲み屋へ行くようになり、どんどん日が過ぎます。また、土曜、日曜の休日を利用して、何か遊びの計画をたてて、それを楽しみに毎日を送っていると、あっという間に月が過ぎます。

仕事が次々とできて、その日のうちには家に帰れない上に、休日出勤の連続また、それ以上に遊びの時間を求めることなどから、体は休まる日がありません。

まあ、会社の生活は、一口で言うと、“時間との闘い”と言えるのではないのでしょうか……

〈会社と大学とは何が違うか〉

学費を収めず給料をもらう、学割がない、旅行などは最も混雑している時にしか行けない……というのが表面的な違いでしょう。

しかし、最も奇異に感じることは、その組織の年齢構成です。つまり、大学のように“おれ、おまえ”で呼べる集団でないということです。各人がそれぞれ確固たる“私の生活”を持っており、学生のように、皆で協力して何かをするという雰囲気をつくることは非常に難しいことです。私が卒論をやっていた当時、“流域環境管理・流域はひとつ”を合言葉に、学生・教官が一体となって、各研究室の枠など取り払った活動が行なわれていました。会社に入ってから、そんな空気に触れることができなくなって、非常な寂しさを感じています。

私たちが、3年生になったとき、総合科学部が各教官バラバラの研究を行っており、ちっとも総合でないといった疑問を文書にして提出したことがあります。この時、教官との話し合いの中で、なんと頭のかたい人が多いのだらうと思いましたが、今にして思えば、教官とて、やはり会社と同じような組織の中で、自分の生活を考えざるを得ないのだなあと思ひ当たります。総合のための共同研究の難しさの意味が、フッとわかるような気がするのです。

逆に言えば、学生には自由な発想と行動が許されています。学生同志で協力して研究することもできます。学生はこの自由を無駄にはしてはいけないし、また学生が、理想に向かって、学部を造っていけばいいのだと思います。

もうひとつ、会社の人間関係は、以上のような理由で、どんなに親しい人でも、やはりどことなく遠慮があります。たとえ、それが同期入社の人間とて同じです。よく会社に入ってから、本当の友人はできにくいといわれますが、真実でしょう。裏をかえせば、学生時代は友人を大切にしなければならないし、また、学生時代に多くの人と知り合い、語り合うことが大切なのです。

最近、特に働き過ぎとか、働き中毒とかいう議論が盛んです。周囲を見まわしても、確かによく働き、残業をしていないと仕事をしていないという見方をされます。休日も会社に出てくる。しかし、よく見ていると、このような生活を情性で送っているような人が案外多いのです。学生は毎日きょうはどんな一日になるだろうか、何かハプニングはないだろうかと考えます。一日一日に何かを期待しながら生きています。ところが、疲れた会社員はこのハプニングをきらいます。毎日が何ごともなく過ぎていくことが幸せなのです。自分の時間を持ち、何かをしようという気がなくなり、会社の仕事にのみ精を出し